

Title	日本列島先史時代の武器と戦い
Author(s)	松木, 武彦
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45954
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	まつ ぎ たけ ひこ 松 木 武 彦
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 19628 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	日本列島先史時代の武器と戦い
論文審査委員	(主査) 助教授 福永 伸哉
	(副査) 教授 都出比呂志 教授 川村 邦光 助教授 高橋 照彦

論 文 内 容 の 要 旨

日本列島の広い地域で農耕社会が成立し、国家形成への道を歩んだ弥生時代、古墳時代は、集団間の確執を武力によって決着させる本格的な「戦い」が生まれた時代でもある。本論文は、その千数百年間における武器や戦闘形態の推移を解明し、それらが社会の複雑化に果たした役割を提示するとともに、武力や戦いという観点から日本列島における国家形成過程の特質にまで論及した意欲作である。論文は序章、結章を含む6章から構成されており、A4判294頁(400字詰原稿用紙換算約850枚)の分量である。

研究の課題や視点を示した序章に続き、まず第1章では豊富な出土資料の型式学的分析に基づいて弥生時代の武器の推移と地域色の実態を検討し、朝鮮半島から流入した各種武器がさまざまに受容され前1世紀の弥生中期までには多様な地域的武器様式が生み出されたが、後期になると各地の武器様式の類似度は高まり、3世紀半ばの古墳時代開始期頃にはほぼ地域色が解消されるという変遷の大枠を提示した。

こうした武器の実態論を念頭に置いて第2章では、弥生時代の戦いと社会変化とのかかわりを論じ、戦いには集団間の同列的な関係を維持する方向に作用するものと階層秩序の形成を導くものの2者があったことを指摘する。そして、列島中央部では弥生中期までは前者が主流であったのに対して、道具の鉄器化が進み大陸の鉄資源の獲得競争が激しくなる弥生後期には後者が顕著になることを明らかにし、東アジアの国際状況を視野に入れながらこの時代の社会変化の本質を戦いという切り口から明確にとらえた。

第3章では古墳時代の武器の検討に進む。古墳時代全期間にわたる武器様式を整理し、短剣・弓矢・ヤリを基本とする前期、鉄製甲冑・長刀・弓矢を備えた「重装歩兵」が整備される中期、馬具が普及し騎兵が加わる後期という3段階を示すとともに、鉄鏃・銅鏃を中心に詳細な分析を重ねて武器や武装のありかたが有力者間の関係の推移を強く反映しているというこの時代の特質を明らかにした。

第4章では、武器自体や古墳におけるその副葬形態を手がかりにして、各地の有力者間の軍事的関係やそれらを束ねた軍事機構の形成過程を考察した。その結果、古墳時代前期未以降、朝鮮半島勢力とのさかんな軍事的接触を背景に倭王権による軍事機構の整備と武器様式の刷新が進み、中期後葉のいわゆる「雄略朝」期には政権の政治支配体制の点でも一つの頂点に達すること、さらに後期には対外的武力抗争の減退とともに武器生産の地方分散化の動きが生じて列島内部での軍事的求心性は一時弱まるが、それを新たな形で把握する中央の施策が律令軍制としての軍事組織の制度的再編成であったことなどを主張した。

以上の検討をふまえて結章では、資源と人口の不均衡状態から戦いが生じるという基本的立場に立ち、弥生中期以

前の耕地や水資源の争奪をめぐる地域内の抗争から、後期以降には鉄資源入手のための交易ルート掌握をめぐる広域抗争へと進んだ結果、集団間の軍事的秩序の形成が明確になり、その延長上に成立した古墳時代の倭王権は鉄資源産出地であった朝鮮半島との和戦両様の交渉を梃子にして、軍事機構の整備と求心的な政治秩序の強化をはかったという理解を示した。そのうえで、重要資源を列島外部に依存せざるを得ない歴史条件のもとにあった古墳時代は、F. エンゲルスが国家社会の指標の一つにあげた「公的強制力」に近い軍事機構が存在した一方で、それが王権による一方的な軍事的制圧ではなく資源獲得のための各地有力者の結集という性格を残していたことから、支配の制度化という面ではなお未熟さを残す初期国家として評価できると結論づけた。

論文審査の結果の要旨

武力抗争という人間活動は、竪穴住居跡や窯跡などと違ってその実際の痕跡が遺跡として残りにくいものである。したがって、日本考古学においては器物研究として個々の武器の形態・機能・編年・製作技法などを検討するアプローチが主流をなしてきた。本論文は、そうした研究史上の問題点や課題を的確に見すえううえで、多量の出土武器資料の分析を出発点に武装・戦闘形態・軍事機構・地域関係・社会構造・国家形成といった次元の異なる大きな論点へと議論を展開したものであり、従来の研究史の到達点を大きく越える成果として高く評価できる。また、戦いという一貫した視点を軸に長期の歴史過程を理論的にとらえた本論文は、弥生時代研究と古墳時代研究の「棲み分け」的な傾向のために両時代を通じた変化の全容を提示することがとすれば不得意であった日本考古学にあって、十分な独創性を感じさせるものである。

資料分析と論理構築のバランスが優れていることも本論文の特筆すべき点である。弥生中期の戦闘用石鏃に明瞭な地域差を見だし、それらが互いに混じり合わないことから、抗争が地域内部にとどまる段階にあったことを指摘した第1章、埋葬時の副葬位置などを手がかりに古墳時代の鉄鏃・銅鏃を性格の異なる3者に分ちそれぞれの意義の違いを読みとった第3章の研究手法などは、ありふれた資料からかくも時代の本質に迫れるのかという新鮮な驚きさえ感じさせるものであった。

さらに、軍事機構の突出と支配制度の未熟さを対比させて列島の国家形成過程の特質をとらえた点も、従来の国家形成に関する理論研究の到達点を十分にふまえた新たな主張を含んでおり、考古学における国家形成論研究において今後つねに検討される仮説となるであろう。

もともと本論文にもなお改善を要する点がなくはない。武器の用途に関連して文中の随所で登場する「呪術的」「祭祀」といった用語の概念が明確に示されていない点や、戦いと社会の関係を東北部や琉球諸島の事例と比較する際に当該地域の研究現状に対する理解がやや不十分であった点などは、論文全体の完成度が高いだけに惜しまれる部分である。

とはいえ、的確な問題意識と手堅い資料分析に基づいて、戦いという斬新な視点から日本列島の国家形成過程の特質をとらえることに成功した本論文は、きわめて高い学術的価値を有していると評価できる。よって、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。